



第6回 地域共生社会推進全国サミット in いこま

特別講演

10/11
fri.

開
会
式

基
調
講
演

発
行
委
員
会
表
示

特
別
企
画

10/12
sat.

分
科
会
A

セ
ミ
ナ
ー

分
科
会
B

分
科
会
C

特
別
講
演

大
会
総
評

引
継
式

シ
ス
ヨ
ナ
ツ
ト
ブ



特別講演 令和6年10月12日(土) 14:50 ~ 16:20 たけまるホール 大ホール

「居場所と出番があるまち」の実現に向けた協働
・私たちができること

社会福祉法人
全国社会福祉協議会 会長

講師 村木 厚子氏
むらき あつこ



皆さん、こんにちは。

ご紹介いただきました村木です。本日は、生駒にお招きをいただきまして本当にありがとうございます。

「居場所と出番があるまち」というとても素敵なお題をいただきました。その実現に向けて、協働する。そして、自分の事を振り返って自分ができること、そして自分たちができるといふ大きなお題をいただきましたが、多分どうやったらできるか、正解はないですよ。どうすればできるかを皆さんと一緒に考える、その素材を少しでも提供できたらと思います。

お手元にもものすごく分厚い資料集がありますが、あれも話せたら、これも話せたらと思って、いっぱい資料を入れましたけど、本日はここで読んでいただいて分かる資料は後で見えていただくことにして、直接、私の言葉で伝えたいところを中心に話をしていきたいと思います。

「居場所と出番があるまち」を作るためにどうしたらいいか、今までやってきた自分の経験の中で、これはヒントになるなと思ったものをいくつか、これから皆さんに紹介をしたいと思います。

まず、一つは居場所や出番がある。苦しい時には誰かに助けてもらおう、そういうまちはどんなまちかということをお自身が助けてもらおう立場になった経験から、まずお話をしたいと思います。

人間誰しも、危機が訪れる、困った状況になるということがあるわけですが、私にもそんなことがありました。いっぱいありましたが、今振り返って、人に助けてもらわないとどうしようもない状況というのは、15年ぐらい前です。全く身に覚えのない事で逮捕されるという経験をしまして、逮捕されて164日ほど拘置所に入れられ、裁判まで1年3ヶ月。袴田さんの58年に比べたらずい

ぶん短いですが、私にとっては結構長い1年3ヶ月を経験しました。拘置所に164日、当時あまり楽しくない生活を送っていた私に、唯一ちょっとした自慢がありまして、それは何かというと、当時の日本人宇宙飛行士の宇宙滞在最長記録が163日だったので、勝ったと思いましたね。なかなか体験できない、拘置所に生まれて初めて連れて行かれまして、大きな鉄筋コンクリートの建物で、三畳一間ぐらいですか。窓には鉄格子がはまっております。廊下と部屋を隔てる扉は重い鉄の扉です。廊下側には小さな窓が一つ開いていて、そこから食器や手紙を差し入れることができる部屋です。入って一番驚いたのは、実に不思議な光景で、三畳一間の部屋の中に洋式のトイレがむき出しでドカンとあります。なぜそうなっているのかと思ったら、自殺や逃亡を企てる事があるため、刑務官から見えない場所があってはいけないのです。

窓から覗くと部屋全部が見渡せるようになっていないといけないので、トイレも個室ではない、こういう不思議な部屋に入れられました。その部屋で、自分で布団をひいて、一晩眠って、明るる日、私が何を考えたか。

朝起きたときに、こう思いました。人間というものは、誰でも一夜にして、支えてもらわなければ生きていけない立場になることがあるのだな。明るる朝、本当に目覚めた直後に思ったのは、正にそのことでした。実際、一夜で状況が変わったのです。そう思った次の瞬間、私は昨日まで無意識のうちに、自分は支える側の人間だと思っていたのだなと気付きました。

意識してそんなことを考えたことはなかったのですが、振り返って昨日までのことを考えると、自分は仕事もして、家族も持ち、家族を養っているため、支える側の人間だと思っていました。世の中には2種類の人間がいるということ、暗黙のうちに自分はそう考えていたのです。自分は支える側であり、あの人たちは支えられる側。でもそれは違うのだと。2種類の人間がいるのではなく、1人の人間があるときは支えてもらい、あるときは人を支える事ができる。同じ1人の人間の二つの面だということ、50何歳にして、初めてそのときに気が付きました。これは後で考えて

10/11
fri.

開
会
式

基
調
講
演

発
行
委
員
会

特
別
企
画

10/12
sat.

分
科
会
A

ラ
ン
チ
ナ
イ
ン

分
科
会
B

分
科
会
C

特
別
講
演

大
会
総
評

引
継
式

シ
ス
ヨ
ナ
ッ
ト
ブ

も、いい経験だったと思います。あれがなかったら、気が付いてなかったかもしれない。そう思います。

本日、たくさんいらっしゃいますけど、あまり逮捕された経験がある方は、いらっしゃらないですよ。一つ、とても大事な忠告をしておきたいと思います。

私が逮捕されて、官僚が悪い事をした。悪い官僚がいたみたいに、犯人だと思われて、テレビ、新聞でいっぱい報道がされました。そういうときには、どこから探してきたか分からないほど、人相の悪い写真が使われます。笑っておられますが本当ですよ。もし、お手元にあまり写りの良くない写真があれば早めに処分をしておくことをお勧めいたします。幸いにも、私は1年3ヶ月でそこから脱出できました。マスコミの方々も途中から、だんだん「あれ、村木さんやってないのかな」という雰囲気になっていきました。すると、マスコミの人たちも賢いもので、次第に美しい写真に差し替えられていくのです。最初は、「なぜこんなことをしたのですか？」とマイクを突きつけていた人たちが、途中から何を言うのかなと思ったら、こう言われました。「村木さん強いですね。」

日本の刑事裁判というのは99.9%有罪ですから、心折れる事もやっぱり多い。そういう中で、私は断固やっていませんといい続けたので、マスコミの人たちが「村木さん強いですね」という。それは、私にとってもものすごい違和感がありました。全然強くないのに、よく考えると、強くない自分が頑張れたのです。「私がやりました」とは言いませんでしたが、なぜ頑張れたのだろうと、一生懸命考えるようになりました。あれからもう15年経ち、今の私の答えがこのスライドです。

まず私が思ったのは、支援が要る、支えが要る、支援も2種類の支えが要る。このことは一番最初から実感をしました。

一つ目の支えは、やっぱりプロの支えです。私の場合は、弁護士さんという支えです。弁護士さんは何をするのかというと、一つは、かっこよく法廷で私の事を弁護してくれる、それからいろんなところに調査に行き、私の無罪の証拠を集めてきてくれる、こういうことを弁護士さんのやる

ことだろうとあっていて、実際にやってくれました。これは福祉の世界で、よく言う課題解決型の支援。問題が分かっている、ニーズに応じた特別なサービスとか、知識とかをくださるという、これを弁護士さんがやってくれましたが、私、初めて弁護士さんのお世話になって弁護士さんがやる仕事はそれだけではないなということが分かりました。

逮捕された明るる日に、拘留所に訪ねてきてくれます。私は、家族にも誰にも会う事ができない。手紙も書いてはいけなし電話もしてはいけなし、パソコンやメールで何かするというのも一切禁止をされている。会っていいのは弁護士さんだけです。弁護人が来てくれて、「村木さん逮捕されちゃいましたね。逮捕ってこういう意味ですよ。これからこういうことがあなたに起こります。これはこうしましょう、あれはこうしましょう。」初めて出会う困難について、一番にまず解説をしてくれました。それから、「誰にも会えませんから、村木さん家族に伝えたい事ありますか。職場に伝えなきゃいけない事ありますか。職場の人がこう言っていましたよ。家族はこう言っていますよ。」コミュニケーションを手伝ってくれました。

少しすると、「村木さん、頑張ろうと頑張っているでしょう。でもね、今ぐらいが一番疲れが出る時期です。ここは頑張りすぎてはいけません。ゆっくりやりましょう。」と、こういうアドバイスをしてくれました。もう少し経つと、「村木さん、裁判が始まりますよ。準備をしなきゃいけませんね。準備大変ですよ。村木さん、一番暇なのは誰か分かっていますか。」それは私ですよ。拘留所に居て3食昼寝付きで、何も他にすることがないわけですから。そうすると、山のような証拠が送られてきて、「村木さん、これをしっかり読んで、ここがおかしい。ここが矛盾している事を全部書き出して、弁護士のところへ送ってきなさい。」こうやって、ずっと1年3ヶ月、私が裁判を戦うのに、伴走をする。今は、福祉で伴走型支援と言いますが、伴走する事を弁護士さんもきちんとやってくれました。これがなければ、頑張りきれなかっただろうと思う。

私は、当時全然分かっていなかったのですが、

後でこれは大事だったなと分かったことがありました。私の代表弁護人は弘中惇一郎という、カミソリ弘中とも呼ばれる非常に有名な刑事弁護の優秀な弁護士でした。見た目はシュッとしていて、少し近寄りがたい感じの人ですが、弘中先生は何度も私に聞いてくれました。「村木さん、どうしたい?」「村木さん、どうしたい?」と言われても困りますよね。生まれて初めて逮捕され、生まれて初めて裁判を受けるのですから、刑事訴訟法が何だか言われても、見た事もないわけです。でも、弘中先生は本当に何度も「村木さん、どうしたい?」と聞いてくるのです。私も答えられず、「先生、聞かないでよ。分からないから、先生がいいと思うやり方でやってよ」と言いたい気持ちが喉元まで出かかりましたが、それを言うのも失礼なのかなと思いつつ、村木さんどう戦いたいと言われて、私が黙っていると、「例えばね、こういうやり方や、こういうやり方、こういうやり方があるんだよ。村木さんはどれがいい?」とまた聞いてきます。仕方がないので、「そういうやり方があるのか。やっぱり私はこれかな。先生、私はこうしたいです」と答えました。すると、弘中先生が「打ち合わせをしましょう」と言うわけです。最初はずっと嫌でしたが、しばらく経って、ふつと気が付きました。あれ、そっか、これが私の戦いだったんだ。

今考えると、私は無罪になったのでそれで良かったのかもしれませんが、有罪になる確率だってありました。そのときに自分で決めていなかったら、ものすごく後悔が残ったと思います。だから、村木さん、どうしたいとずっと聞かれ続ける事で、自分で考え、自分で決めて戦いました。自分の戦いだと思うと、だんだん本気になれましたし、もし結果が悪くても、ちゃんと戦ったという感覚が自分の中に残ったと思います。

これは支援をするときも、例えば親と子どもの関係でも同じ事が言えますよね。圧倒的に親の方が世の中のことを知っているから、「こうしなさい」と言いたくなる。しかし、やっぱりそうではないということ、このときに教えてもらいました。「村木さん、どうしたい?」というのは、本当に大切な自分に対する問いかけだったのだと思

います。



プロに早く助けを求める事は本当に大事で、この経験をしてからとりわけいろんな所に行ったときに、早くプロの助けを求めましょう。助けを求める事は恥ずかしい事ではないし、早くいいプロに出会う事はとても大事ですよと皆さんに言うようになりました。

でも、いいプロの助けがあればそれで自分が頑張れたかというところでもないです。弘中先生が、「僕なんか来てもそんなに元気でないでしょうけど、ほら、これ見たら元気になるでしょう。」と、家族の手紙を持ってきたり、写真を持ってきてくれたりしました。

私は、自分の家族は自分の事を200%信じてくれる自信が実はありました。しかし、友達や職場の人たちの中には、実際にこんなふうを考えている人もやっぱりいました。村木さんはそんな変な人ではないけれど、何か事情があって、国会議員の言うことを聞いてああいうことやらざるを得なかったのかなと、私がやったことを信じてしまった人もいます。皆どう思っているのかと、やはり不安でした。

ある日、弁護人が来て、面会室はアクリル板で仕切られているのですが、彼はアクリル板に白い紙を押し当てました。なんだろうと思って見ると、真ん中に「真実を貫け」と書いてあり、その下に友人や知人の名前がざっと書かれていました。まだ信じてくれている人がこれだけいるということで、ものすごくパワーをもらいました。

自分の所へ取材に来ていたマスコミの人が、「村木さん強いんですね。」と言うから、「いや、私強くないけど、じゃあどんな時に人は弱くなるの?あちこち取材して、皆さん、どんな時にやっ

でもないのにギブアップして、やりました、って言っちゃうの？」と聞くと、二つ上げてくれました。

一つは、1人去り2人去り、そして誰もいなくなった状態だと、もうどうでもいいやという気分になるそうです。

それからもう一つは、眠れない、食べられないという状況になったとき。弱っているときに最後、どこで支えてやるかというのはこの二つがものすごく大事だと、このときに教えてもらいました。病気で回復するときはいい医者がある、いい医療関係者がいる事は大事ですが、見舞いに来てくれる家族や友人がいたり、早く戻って来いよと言ってくれる職場の人がいたりという、プロと自分の周りの人の二つの支えがやっぱり必要なこのときに思いました。

でも、面白い事に、私が、私絶対大丈夫と思った瞬間が、ちょっと別のところにありました。

逮捕されて5日目か6日目ぐらいに、なぜそう思ったか分からないですけど、ふっと、ここは娘のために頑張らなきゃと思ったのです。私、娘が2人いて、当時は1人が社会人で、下の子が高校3年生の受験生だったのですが、もし私がここでちゃんと頑張らなければ、娘たちが将来、何か大変な事が起きたときに、お母さんも頑張れなかった、じゃあ自分たちも頑張ら切るのは難しいんじゃないかと思うのか、お母さんもちゃんとあのとき最後まで頑張っていたから私達もきっと頑張れると思うのか。

この違いは結構大きいのではないかと気が付いて、ここは娘のために頑張らなきゃと思った瞬間に、これで私絶対最後まで大丈夫だなど思えたんですよ。なんか面白いですよ。皆に支えてもらわないと何もできないと思った瞬間があって、それから何日か後に、それでもまだ自分には役割があるぞと思って、そのときにちゃんと強くなれた。これは自分にとってすごく大事な経験でした。

今日ここにいらっしゃる方は、多分よく経験をされていると思いますが、誰かを支援するときに、支援が手厚いという事は大事ですけども、その中で支援されている人が、自分もまた何かできる、役立てると思った瞬間というのは本当に回復を

していきますよね。そういうことをこのときに私自身も体験をしました。



ただ、当時は、あまりそのことの意味が分かってなかったです。この意味が分かったのは、裁判が終わって、無罪になってからですね。

皆さん、公務員はとっても不思議な仕組みがあって、訴えられているとき、無罪か有罪か分からない裁判を待っているうちは、起訴休職と言って無理やり休職をさせられていて、お仕事ができないです。無罪が決まると何が起こるかという、その瞬間に休職が解けてしまうのですよ。1年3ヶ月裁判と戦って、無罪だと言ったら電話がかかってきて明日から出勤と言われます。すごい仕組みでしょう。いや、びっくりしました。

明日から出勤しましたが、それから半年経って、東日本大震災が起きました。その1ヶ月後に、復興大臣のお供で福島郡山にある大きな避難所に行きました。当時1,000人ぐらいの方が避難をしておられる避難所で、当時の防災担当の大臣が実は民主党政権で蓮舫さんのときでした。

蓮舫大臣のお供で私も一緒に福島にいて、大臣が一人一人と、目を合わせて、手を握ったり肩を抱いたりしながら、「大変でしたね。ご不自由なことがいっぱいあるでしょうね。何でも言ってください。できる限りの事をしますから。」と言って、一人一人を激励して歩かれるわけです。お付きですから私は一歩後ろ、付いて歩いているのですが、無罪判決から半年後ぐらいなので、結構皆さんが、覚えていてくださったんですよ。

ほら、無罪判決もらった後ですし、美しめの写真になっていますから。「あっ、村木さんだ、良かったね。頑張ってるね。」おかしいですよ。頑張ってくださいと励まして歩く大臣の後ろを、ずっと励まされながら、応援されながら歩いたのです。

こんなときに、私なんか声をかけてくれるなんて、なんてこの人たちは優しく強いのだと思いました。でも、とつても決まり悪かったですし、どうしようどうしよう、違うんですけどみたいな感じで歩きました。

東京に帰って、とつても不思議な体験でもあったのでその話をしたら、さわやか福祉財団の堀田力さんが、すごく褒めてくれて、「村木さん、いいことしたね」と。「何ですか？」と言ったら、「福島の人、多分被災から1ヶ月、皆に支えられて、皆に励まされて、それはそれでとつてもありがたい大事な事で嬉しかったと思うけど、人間は支えられるだけ、励まされるだけでは本当は元氣になれない。村木さんを励ます事ができて、福島の人ちょっとだけ元氣になれたと思うよ。」と言われたんですよ。「そういうことか！」と、すごく腑に落ちた。

福祉とは、支援する側がその人を助けるということに目が行きがちですけれども、一番大事な事は、その人もまた何かができる、誰かのために何かができるという状況までいくということを大事にしていけないといけないし、ましてや、上から目線の支援は駄目だなということをすごく思いました。

実は、マスコミがね、最初乱暴な取材をされて、その次に「強いですね。」と言われて、その次に何が起きたかということ、村木さん悲しいでしょう、悔しいでしょう、腹が立つでしょう。要するに、恨み事を言いましょうという取材がものすごくたくさん来たのです。そのときに、私は、これはすごく怖いと思いました。ひどい目にあった、悲しいですというポジションに自分を置いたら、立ち直れないぞ、とても危ない罠だと、そのとき思っ、絶対この罠にはまらないようにしようと思いました。

当時すごく面白かった事がある。そういう意味で、泣いたり悔しがったり怒ったり、そういう顔をしてたくなかったから、できるだけ笑っていたいと思いました。

ところが、ある時、すごく暑かったので記者会見のところで、ちょっと眼鏡を外してハンカチで眼鏡の下の汗を拭いたのです。

どうやっても泣いているように見えたらしくて、そのときだけものすごくたくさんのフラッシュが焚かれて、もう圧倒的に泣いているように見える使われ方なんですよ。

だから、かわいそうなやつも好きだということですよ。これも危ないと思いました。だから、かわいそうなやつにはいけない。これもこのときの大事な学びでした。当初はこの三つをずっと上げていました。自分が本当に困ったときに必要だったのは何かというので、この三つです。

二つの支援と、誰かのために本人が何かできる状況を作るというこの三つだったのですが、もう少し経ってから、実は4番目を加えました。

世間も案外大事で、これは何かということ、164日拘置所に居て、保釈をされて埼玉の家に戻りました。そこから今度裁判が大阪であるので通わなければいけなくなったのですが、最初、家を出るのがすごく怖かったです。無罪になるまでは要するに、被告人じゃないですか。あんなことやったという報道が一方的にされているわけで、まちを歩いて、誰かが何か言ってくるんじゃないかとかちょっと被害妄想に過ぎたかもしれませんが、後ろ指を指されるんじゃないかと思って、情けない事にしばらく外に出られなかったです。でも裁判に大阪まで行かなきゃいけない。

その私を救ってくれたのは、大阪の人でした。新大阪の駅で降りて、売店で例えばお水とか、何か買うじゃないですか。お金渡して、お釣り貰ってレシート貰っていると、売店のおばちゃんが、頑張んなさいよと言ってくれるんです。タクシー乗ると降りる時に、運転手さんがちゃんと餡ちゃんくれて、頑張んなさいよと言ってくれるんです。それがあって少しずつ怖さが薄れて、ある日、私の裁判を娘が傍聴してくれると言って、娘と2人で、新幹線で大阪に行って、ご飯食べてホテル入って、明るる日、裁判所行って、私は被告人席で娘が傍聴席という、こういうので裁判応援に来てくれる日がありました。

2人で大阪のお好み焼き屋さんに入って、お好み焼きを2人で、テーブル席で食べていると、横に大きなグループが居て、この人たちが、すごく話しかけてくるのです。あら、嫌だな、顔ばれし

ているのかなとか思いながら、でもすごくたわいない話をしてきて、「どっから来たの?」、「そら、きた」とか思うじゃないですか。「どっから来たの」、「いや、埼玉から」、「だよね。そっちから来たよね。」「じゃあ、あなた、東京名物東京ばな奈って食べた事ないでしょ。あげる。」東京ばな奈をくれて、もうなんか本当に馬鹿話がすごく楽しかったと思って、娘と私と先に食べ終わって、お先に失礼しますと言って、会計をして、出口行って、忘れもしません。出口に、のれんがかかっている、娘がこっち側にいて、私がのれんを片手でかき分けて、娘と2人敷居をまたいだその瞬間に、さっき騒いでいたお隣の大きなグループのあたりから、「頑張れよ!」という声が掛かる。娘と思わず顔を見合わせて、「ああ、ばれてたんだ。多分何も言わないでいてくれたんだ。最後に応援してくれたんだ」と思って、ちょっとね、うるっとしました。

今大阪のまちで会っても、多分顔も分からないし当然名前も知らない人たちです。だけど、そのときにやっぱり娘と私がどれくらい励まされたか。これは何だろうと。何の利害関係もないし、この人たちが応援しているか、あいつなんだとか思っているか、実害は実際には関係ないのかもしれない。

これに似ているなと思ったのが、水難事故救命胴衣を着けていたか、何分で救助が駆けつけられたかということが生死を分ける。でも、水難事故のときによくニュースの最後の方で、ちなみに、当時の水温は何度でしたと言うじゃないですか。私、世間はこの水温に似ているな。瞬く間に、体温を奪われるのか、それともとにかく浮いてさえいれば救助を待てるのかというのが、そのときの水温によるわけです。だから、私達やっぱり、世間も大事。

例えば、一番典型なのが薬物とかかもしれないですね。もちろんやってはいけないことだけど、世の中がどう見るのか、お薬なんかやったやつは、もう駄目な人間だと思えるのか、何かいろんな事情があったんだろうけど、もう1回頑張れよと思ってくれるのか、この世間の温度は結構大事。

15年経った今はこの四つが、困ったときに大切

な支援かなと思っています。そういう意味では、もう50何歳にして、とっても大事な事をこういうふうに気付かせてもらったという意味で本当にあの事件の経験は良かったかなと思います。



もう一つだけ、事件で私が勉強した事をちょっと簡単に紹介したいと思います。拘置所にいるときは、私は個室にいて、まだ刑が有罪か無罪か決まってないので刑務作業もなく、日がな部屋にいます。3食、食事を運んでくれるのは刑務作業の人たちでした。私がいる棟は、女性が収容されている棟なので、女性の受刑者が運んでくる。

若いかわいい女の子が3人ぐらい一組で、女性の刑務官の指導を受けながら非常に真面目に毎日働いている。なんてかわいい良い子たちだろう、なんて真面目によく働くんだろうと思って見ていました。見ていましたが、よくよく考えると、刑務所にいる受刑者です。一体この子たちは何をしたいのだろうと思って、どうしても知りたくて、取り調べの検事を捕まえて、「一体あの子たちは何をしたいんですか?」と聞いてみました。

一番多いのが薬物、二番目が売春という答えが、検事から返ってきました。後で勉強してみても本当に厳しい状況に置かれた子たちが薬に依存をしていくとか、貧しいが故の売春とか、いろんな状況があるということを知りました。私がそういうことを言ったので、検事さんはこいつこういうことに関心あるのかと思ったのじゃない。「村木さん、僕ら、正月前は忙しいんですよ。」と話してくれて、「何ですか?」と言ったら、お正月を刑務所で過ごしたいから、逆算して、秋に万引きとか、無銭飲食をするという人がとっても多く、そのシーズンに検事が忙しいですと。

その話を聞いたのが6月で、私11月の終わり